

「医の道を求めて——ウィリアム・オスラー博士の生涯に学ぶ」

日野原 重明 著

宮崎医科大学学長

木 下 和 夫

私の医学部生時代(1951～1955年), わが国医学界は米国医学の強い影響を受けていたとはいえ, オスラーは教科書でオスラー結節というのを知り, アメリカの偉い内科の先生であつたくらいしか知りませんでした。

ところが, 私が脳神経外科医として留学(1964～1965年)した先は, オスラーの母校であるマギル大学の付属の Montreal Neurological Institute (MNI) であり, その創設者のペンフィールドはローズ奨学生としてオックスフォード大学に学んだ際, オスラーの薫陶を受けた間柄で

あつたのです。私は MNI では, まず神経病理学を学んだので, 脳を取り出しに隣の Pathological Institute に行った際, 剖検室に近い部屋に, 数十個の大きな臓器標本ビンが展示されているのに気付きました。よく見ると, それらは全部オスラーが剖検し, 教材として液滲標本としたものでした。少々ショックでした。明治時代に作られた標本が, まだきれいに保存され, 現に教材となっているなど, わが国ではほとんど考えられないことであつたからです(有名な人の脳などは保存されていますが)。ここで改めて, オスラーはカナダで

生まれ, マギル大学で医学を学び, そこの教授となり, その後ペンシルバニア大学教授, 更にジョンズ・ホプキンスの教授になったことを知つたのです。最後はオックスフォード大学の欽定教授でした。

そして, マギル大学内に Osler Library という, オスラーが集めた膨大な医学の歴史的書物の図書館があることを知り行ってみました。驚くべき図書館でした。今は巨大な円柱型のマッキンタイアビル内に, 内部は以前の古い建物そっくりに移されています。そこで友人にオスラーの伝記はないかと尋ねると, これ

また驚いたことには近代脳神経外科の父クッシングが書いたものがあった。この本でクッシングはピューリッツァ賞を受賞したということでした。二分冊になった合計 1,413 ページの本で、小さな活字で埋まっています。

オスラーについては、日野原先生はじめ多くの方の御努力と、オスラー自身の残した著書・講演などによってわが国医学関係者にその偉大さが理解されても、北米・英国の医師とオスラーとの間柄とはやはり大きな隔たりがあると思います。それは北米の医師の中で生活してみた私にはよく理解できました。わが国からみると、オスラーは遠い国の、また明治の人なのですが、北米・英国ではオスラーに直接接していた人も数多く生存し、また孫弟子も多いのです。彼の地の人にとっては、クッシングのオスラー伝を読むと、個人的に親しい人、聞き慣れた名前がまだ多数登場してくるのです。そのような身近な人とのオスラーとの関係、エピソード、取り交わした手紙の内容などは、読む人にとって親しみを加えるものです。

クッシングの書いた伝記は多くの人に読まれ、感銘を与えました。しかし、外国人にとっては時間的にも距離的にも遠い存在で、読むのに大変な努力を要するのは確かです。私がクッシングの「オスラー伝」を読み切れなかったのは私の怠慢のせいもありますが、今まで述べた理由もあると思います。

ジョンズ・ホプキンスの、オスラーと共に Big Four (オスラー、ハルステッド、ウエルチ、ケリーの 4 名) の 1 人に数えられ、真の近代的外科の創始者の 1 人と思われるハルステッドについても同じことが言えます。

私が MNI でレジデントをしているとき、アメリカ人のチーフレジデントと並んで廊下を歩いていると、年輩いた看護婦さんが前から来ました。チーフレジデントは立ち止まって、その看護婦さんと挨拶し、何かちょっと喋っていました。終わってすぐ、彼は私に“今の看護婦さんは、若いときジョンズ・ホプキンスでハルステッドの手術時の手洗い看護婦 (scrub nurse) だった”と教えてくれました。

私にとって遠い存在であったハルステッドの手術を介助した看護婦さんが、まだ現役で、白衣で歩いているというのは、大きな驚きでした。アメリカ人医師にとって、前世紀末に建てられたジョンズ・ホプキンス病院の建物がまだ使われているように、Big Four もまだ身近な存在だったのです。

私がカナダで感じたのは 30 年前の北米医師にとってオスラー、ハルステッドらはまだ身近な存在であるということでした。

それから 30 年後の現在、クッシングの「オスラー伝」は北米でさえ古臭くなりかかっているでしょう。

日野原先生にとってオスラーの伝記は、オスラーが亡くなって 5 年後の 1925 年に書かれたクッシングのものを訳するのが一番楽であったでしょう(きっと全訳をなさっていると思います)。しかし、それから 70 年近く経過し、登場してくる人々はほとんど亡くなり、時代は変わりました。日野原先生はクッシング著の「オスラー卿の生涯」(The Life of Sir William Osler)の筋を下敷きに、新しい目で様々なオスラーの著作・手紙、またオスラーに近かった人々の著作や思い出などを加え、一方ではわが国では馴染みのない部分を省略して、現代のわが国の

読者に、オスラーの生涯、思想の全容が理解しやすいように構成され、書き改められました。

私は、日野原先生が「medicina」に 1972 年より約 10 年、112 回にわたって発表された「ウィリアム・オスラーの生涯」の連載が終わったとき、医学書院に、すぐに写真入りでまとめて出版する予定はないのか尋ねたのですが、内容があまりにも多すぎ、1/3 くらいに縮めないで売れる本にはならないとの返事をもらい、少々残念に思っていたのですが、それから約 10 年、やっとこのような形で完成されたのを見たとき、やはり本は詳しくれば良いものでもないと思っていました。

この本を読んでいて、オスラーの医学教育改革の思想と情熱を知るとき、1984 年にアメリカ医科大学協会 (AAMC) が出した、21 世紀のための医学教育改革提言 GPEP レポート (Physicians for the Twenty First Century; 21 世紀の医師。医学教育振興財団監訳) と相通ずるものであることを知りました。

オスラーは過去の人ではなく、現代に生き続ける人です。本書は多くの文献も加えられており、更に詳しく、また深くオスラーの研究をしたい方には参考となるでしょう。

御高齢で超多忙な日野原先生が、ライフワークの 1 つとして長い年月をかけてこれだけにまとめられ、若い読者にも親しみやすい、オスラーの伝記として完成されたことには改めて深い敬意と感謝を表します。この本の完成のためには多くの方々の援助、協力があったことでしょう。支えられた方々にも厚く御礼申し上げます。

● A5 頁 904 図 11 写真 35 1993 定価 4,944 円(税込) 千 400

医学書院 刊 (☎ 03-3817-5657)